

令和 3 年 6 月 24 日現在

機関番号：14301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2020

課題番号：18H05562・19K20772

研究課題名(和文) 朱子『資治通鑑綱目』と綱目学の展開

研究課題名(英文) Zhu Xi's "Tong jian gang mu" and the development of research on "Gang mu"

研究代表者

福谷 彬 (Fukutani, Akira)

京都大学・人文科学研究所・助教

研究者番号：40826004

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：朱熹『綱目』の正統論を理解するには、朱熹と同時期の広義の道学者を視野に入れる必要がある。彼らは、軌を一にするように、蜀漢正統論と諸葛亮礼賛の文章を残していたからである。特に、湖南学の張南軒は『諸葛武侯伝』という諸葛亮の伝記を残す。張南軒が鼓吹する諸葛亮の「漢賊並び立たず」とする精神こそが、蜀漢正統論の淵源であり、張南軒が特筆大書し、また朱熹へと受け継がれた点なのである。また、一時期朱熹は諸葛亮を「道統」上の人物としてすら位置づけようとしていた。後世混同される傾向のある道統論と正統論とは、朱熹の段階ですでに、接近していたと言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、蜀漢正統論は、国土の大半を奪われた南宋士大夫が、同様の状況の蜀漢に自らの王朝の状況を重ねたと理解されてきた。本研究では、同時代の多くの士大夫、特に道学系統の士大夫が、蜀漢に対する同情的な見解を多く有していたことを明らかにした。蜀漢正統論の間でよくみられる共通点は、丞相・諸葛亮に対する自己投影である。それは、皇帝の権威に対し指導的な姿勢で接し、また文官でありながら軍功を挙げた諸葛亮の姿に、宋代士大夫官僚の理想形を見たのである。このように、南宋に、蜀漢正統論が生じたことの新たな側面を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In order to understand the theory of legitimacy of Zhu Xi's "Tong jian gang mu", it is necessary to look at the Neo-Confucianists of the same period as Zhu Xi. In particular, Zhang Nanxian of the Hunan School wrote in praise of Zhuge Liang and explain the legitimacy of Shu Han dynasty. The spirit of Zhuge Liang's "Han Dynasty and the usurper have an irreconcilable relationship" that Zhang Nanqian promotes is the origin of the theory of legitimacy of Shu Han, which Zhang Nanqian notably wrote about, and which was passed on to Zhu Xi. At one time, Zhu Xi even tried to position Zhuge Liang as a Neo-Confucianists figure. It can be said that Zhu Xi was already close to the Zhu Xi of the Han Dynasty, and at one time he even tried to place Zhuge Liang as a Neo-Confucianists. There is a tendency in later times to confuse Zhu Xi's theory of legitimacy with the theory of orthodox. This is probably because they were already close in Zhu Xi's time.

研究分野：中国思想史

キーワード：朱熹 綱目 正統 道統

### 1. 研究開始当初の背景

『資治通鑑綱目』(以下、『綱目』)の歴史哲学は、前近代の東アジア世界の歴史哲学を代表する重大な意義を持つ。東洋の歴史思想と西洋のそれとが対比検討される時、東洋の歴史思想の代表としてしばしば取り上げられるのが、『綱目』の歴史哲学なのである。申請者の観点を明確にするために、『綱目』の歴史思想は一般的にいかにか考えられてきたか述べたい。

『綱目』は朱子が記した編年体の歴史書で、戦国時代から五代十国までを扱う。北宋の司馬光が著した『資治通鑑』の内容に不満を持った朱子は自身の思想的立場から『通鑑』を『綱目』に再編集した。『通鑑』と『綱目』の大きな違いは、歴史を記す際に『綱目』では、価値判断を含む記述(「一字褒貶」)をする点である。有名な例では、司馬光の『資治通鑑』は三国時代で魏を正統とする体裁を取るが、『綱目』は蜀漢を正統とする。三国時代、魏は政治的に最も優勢だったのに対し、蜀漢は王朝成立の大義はあっても国力は最も弱体だった。そのため、『通鑑』は史実を重視するのに対し、『綱目』は観念重視の歴史書と評価され、その点こそ『綱目』が東洋の歴史思想を代表すると目されてきた所以である。しかし、申請者によれば、ここに大きな誤解が潜んでいるのである。『綱目』には確かに勸善懲惡の意図があるが、それは朱子が裁判官の立場から歴史人物を裁定し、悪玉を悪し様に記し、善玉を美化して記す、というものではないのである。

申請者が着目するのは朱子が記した『綱目』の「凡例」である。その「凡例」は「こういう事態はこの字を用いて記述する」という方針を記す。その記述の内容を具さに見る時、『綱目』という歴史書を著した朱子の真の意図が見えてくるのである。

例えば「凡例」によると、「正統」とは「天下を統一し、二代以上続いた王朝」を指すに過ぎず、何ら道徳的な評価は含まれない。朱子が蜀漢を正統とするのは、単に蜀漢を後漢の継続と見るからである。また、正統の王朝の戦争を「征」や「討」と記し、「篡賊」の王朝の戦争を「攻」や「寇」と記すのは、戦争の主体が「正統」か否かを問題にするに過ぎず、道徳的な毀誉褒貶と直結しない。『朱子語類』や朱子の書簡を見れば、朱子はこれらの字を用いることは別に毀誉褒貶を行っており、しばしば正統王朝の政策を批判する。

むしろ、大義のない戦争であってもあえて「征」や「討」と記すことで、本来かくあるべきという理念としての「正統」王朝と現実とのギャップを明るみにする側面があるのである。

『綱目』の記述法には、読者に反省を促し自己改革へと導く意図があったのである。

これに対して、『綱目』の注釈は、「正統」の王朝の「征」や「討」、「篡賊」の王朝の「攻」や「寇」の字を、そのまま、朱子がこれらの王朝に対して下した毀誉褒貶と捉える。『綱目』の注釈の理解に従えば、「正統」王朝の政策は原則「善」なる行いということになり、それにたてつく勢力は全て「悪」として記されていることになる。

上記のように、『綱目』が「正統」の王朝の政策を「善」なるものとして記述するのは、それが真に「善」と呼ぶに値するか読者に反省を促すことを企図していた。しかし、『綱目』の注釈に基づくことで、朱子のこのような意図は完全に見見過され、『綱目』は常に「正統」王朝を擁護しているかのように読まれるのである。このように、『綱目』の注釈を通すことで『綱目』の中に、時の権力者に迎合的な思想が形成されるのである。

このことは、単に朱子の思想の誤解というのに留まらない。一般的に朱子学は、既存の秩序を擁護する頑迷固陋な保守思想としてのイメージがある。上の「綱目学」的な歴史観は、そうした一般的な「朱子学」のイメージとまさに重なっている。

しかし、『綱目』の凡例の本来の意図を分析して、注釈の覆いから朱子の本来の思想を開放することによって、上記のような保守思想としての「朱子学」像は『綱目』の注釈を通じて形成されたということが示されると申請者は考える。

以上のように、本研究は、自己改革の思想として出発した朱子の思想が、いかにして保守の思想へと転変するか、という問題に、一つの視点を与えるのである。

### 2. 研究の目的

道学思想は、朱子に代表され、前近代の東アジアに絶大な影響力を持った。朱子を代表とする道学思想の歴史思想を、当時の南宋の政治状況と絡めて解明しようとするのが本研究の目的である。具体的には、南宋の朱子が記した歴史書である『資治通鑑綱目』(以下、『綱目』)と後世『綱目』を尊んで著された「綱目学」の書物(『綱目』の注釈や『綱目』の体裁を模倣した歴史書)の思想的分析を主たる作業とする。以上を踏まえ、本研究は、朱子や朱子を含む道学士大夫の歴史思想の特徴を、その背景としての南宋の思想や政治の文化と絡めて総合的に考察することを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究は以下の2点に留意して進められる。

・朱子本来の歴史哲学を考察する際には、朱子の形而上学や王霸論などに留意して、朱子学の全体的な枠組みからの解明を心がける。

・『綱目』執筆時の朱子の本来の方針と、実際に出版された『綱目』の本文、それから後世

『綱目』に付けられた注釈の内容とを自覚的に区別して考察する。  
そして、上記から解明した朱熹の『綱目』の歴史思想と、同時代の思想家の文献に表れる歴史思想を比較する。

#### 4. 研究成果

研究の進展に伴い、本研究は当初予想していたのとは、異なる方向で『綱目』の意義に関する研究成果を得ることができた。大別すれば、文献学的方面での成果と、政治思想方面での成果である。

まず、文献学的方面での成果についてである。これまでの研究では、『綱目』は、朱熹の弟子の続筆によって完成しているため、現行の『綱目』がどこまで朱熹の本来の方針を踏まえたものであるのかわからない点が多いと指摘されることが多かった。特に、朱熹が定めた編集の方針である「凡例」については、偽作説も説かれていた。しかし、本研究では、朱熹の『綱目』とほぼ同時期に執筆された、呂祖謙の『大事記』の記述に『綱目』の引用文が存在することを発見した。その内容やその他の史料を精査することによって、以下の見通しを得ることができた。

朱熹が執筆していた草稿段階の『綱目』には、明確に現行の「凡例」の内容とは異なる方針で書かれていた箇所が存在すること。

朱熹の『綱目』修正は、「凡例」の変更・修正を伴うものであると考えられること。

朱熹が最晩年に出したと考えられる『綱目』の修正点については、「凡例」で踏まえられていない点が多いこと。

以上を踏まえ、現行の「凡例」の内容は、1184年～1190年頃に朱熹自ら定められた方針に淵源すると推定されると結論付けた。

次に、政治思想としての『綱目』の意義についてである。『綱目』執筆の意義については、従来では、蜀漢正統論の提唱という点ばかりが注目されてきた。国土の大半を奪われた南宋士大夫が、同様の状況の蜀漢に自らの王朝の状況を重ねたことが主たる理由として指摘されてきた。

一方、本研究では、宋代の政治・外交情勢や道学系士大夫の著作を分析する中で、新たな側面が存在することを明らかにした。それは、宋代という時代の新たな理想的臣下像としての諸葛亮の顕彰という点である。宋代の道学者が諸葛亮に見出した美点は以下の点である。

臣下でありながら、皇帝に対して指導的な姿勢で仕え、政治を主導したこと。

文官でありながら、武官を統率して軍事面で少なからぬ功績を挙げたこと。

王朝乱立期の王朝の正統性は、軍事力・政治権力ではなく、統治の大義名分の有無を基準にすべきことを明確に説いたこと。

は北宋期から士大夫にとっての理想とされた点であり、は南宋期に士大夫に求められた価値観であった。北宋から南宋に至り、対外的な緊張関係が高まり、中華王朝として威信が大きく揺らぐ中で、の全てを兼ね備えた中国史上稀有な人材として諸葛亮が大きくクローズアップされることとなったのである。諸葛亮が仕えた蜀漢を正統王朝とする『綱目』はそうした時代背景の中で成立したのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 福谷彬	4. 巻 94
2. 論文標題 『通鑑綱目』研究の現状と『綱目』初稿の意義 --呂祖謙『大事記』に注目して--	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東方學報	6. 最初と最後の頁 143~171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/250676	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 福谷彬
2. 発表標題 歴史解釈と「忠臣」の創造 張シヨク『諸葛武侯傳』を中心に
3. 学会等名 「漢籍と中国史」予備研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 第三屆儒家經典的跨域傳釋國際學術研討會	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 『文史哲 文学と哲学から見た『文史通義』』	開催年 2018年～2018年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------